論　文

立教大学観光学部紀要 第20号 2018年3月
Rikkyo University Bulletin of Studies in Tourism No.20 March 2018
pp. 40-53.

フォト・エリシテーションを用いた教育と社会実践：宮本常一写真を通じた佐渡の開発/観光史研究から

Education and Social Practice by Photo Elicitation Research: A case study on the history of local development in Sado Island through an analysis of Miyamoto Tsuneichi's photography

門田岳久*・小西公大**
KADOTA, Takehisa; KONISHI, Kodai

Abstract: The purpose of this paper is to clarify the ripple effects of research based on the "Photo elicitation" method using field photography on both fieldwork education for students and social practice in a research place. "Photo elicitation" is an anthropological field research method that could regenerate people's emotions and memories by presenting old pictures to people who are related to the subjects of the pictures. We have been doing an ethnographic study about the history of local development in Sado Island with our students since 2016, where we are gathering a lot of oral history by using former ethnologist Miyamoto Tsuneichi's photographs which were taken in this island during the 1960s and 1970s. The ethnography written by us including students, as a result of this project was picked up by the local media in Sado, this news created several derivative events. This indicates that ethnographic reports are not only static books, but they also exist within agencies that widely circulate to the field and could formulate other people's reality. Therefore, for students, such an action-research could be a valuable opportunity to learn we could be better able to understand each other with the people in research locations.

Key words: フィールドワーク教育（Fieldwork Training），アクションリサーチ（Action Research），フィールド写真（Field Photography），エスノグラフィ（Ethnography）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　フィールドワーク教育を取り巻く課題
Ⅲ　宮本常一写真の特徴
Ⅳ　佐渡における大衆観光と宮本常一
Ⅴ　フォト・エリシテーションの実例と成果
Ⅵ　ローカルメディアミックス
Ⅶ　おわりに

Ⅰ　はじめに

筆者らは2016年以来新潟県佐渡島において，民俗学者・宮本常一（1907～1981）が生前撮りためたフィールド写真（field photography）を使用した地域の開発史・観光史にまつわる民族誌的研究を，学生のフィールドワーク教育を兼ねて実

* 立教大学観光学部・准教授
** 東京学芸大学教育学部・准教授（立教大学観光学部・兼任講師）

施している（以下宮本写真プロジェクトと称する）[1]．宮本写真の被写体となった場所や事物を歩いて観察し，当時と現在との変化を写真撮影しながら明らかにするとともに，当時を知る地域住民に記憶を尋ね，想起される語りを収集し，そのデータをもとに近代における佐渡の開発史やマスツーリズムの盛衰を明らかにするというものである．

過去に撮られた写真を用いた調査法は，映像人類学の分野でフォト・エリシテーション（photo elicitation interview/research）と呼ばれており，被写体となった世界に住む人びとの感情や記憶を即時に喚起し，広がりを持った語りを誘発させるための有効な手段とされている（Collier and Collier 1986）．人間の記憶の特性に基づき，必ずしも過去の客観的な事実にこだわらず，史実かどうかよりも当人のイマジネーションやリアリティをすくい取る方法でもある．それは単に調査者＝研究者にとってのメリットだけでなく，インフォーマントにとっては写真やナラティブを介して過去と現在とをつなぎ，自己省察の機会ともなるものである．筆者らはこの手法が調査研究を通じた一種の社会実践に拡がりうるものだと認識し，調査で得られた知見や人びとの意思を汲み取りながら，現地の人びとととともに写真展を開催したり，ドキュメンタリーフィルムを作ったりすることで，双方にとって新たな発見を得ようと試みてきた．

ではこうしたフィールド写真を活用したアクションリサーチは，教育面においてどのような効果が認められるのだろうか．写真を撮ったり見たりするという行為自体，日常や生活世界を異化し，あたりまえの世界を偶発性に満ちた豊かな教材へと変質させる行為となることは，社会調査法の一環として議論されてきた（秋山・小西編 2016）．他方，年々高画質化するスマホカメラを携えた学生にとって写真や撮影は極めて日常化された行為であり，写真やカメラを用いるというだけでは現実の異化作用は得にくい．他者を知り理解する，という目的を有する人類学的フィールドワーク（あるいはそのための教育）において不可欠な異化作用を写真撮影に持たせるにはどのようにすればよいだろうか．

本論は，佐渡における宮本写真の活用を通じた研究・教育・社会実践という3つのフェーズを取り上げる．いずれのフェーズも不可分に絡み合っているため，それぞれの相互反照がもたらす化学反応を明らかにするものである．とりわけ研究主軸で考えられてきたフォト・エリシテーションが教育や社会実践という両側面で持ちうる波及力を精査するというのが目的である．

Ⅱ　フィールドワーク教育を取り巻く課題

はじめにフィールドワーク教育をなぜ社会実践と接合するのかという点を述べておきたい．ここでいう社会実践とは研究や高等教育の成果あるいはプロセスを，現実の社会問題の解決や公共性の高い取り組みの促進につなげたり，研究者・学生側だけでなく地域や社会にも資する取り組みにつなげたりすることを意味する．

狭義のフィールドワークは，文化人類学がその核として構築してきた方法論である．英国の人類学者B.マリノフスキーによる『西大西洋の遠洋航海者』（1922）がその端緒となり，長期間の参与観察を通じて民族誌（エスノグラフィー）を作成するという研究のスタイルが形成されていった．現地社会に長期間身を置き，現地の言語を習得し，人びととの交流を通じて親愛・信頼関係を構築しながら，人びとの生きる世界を「内から」理解するというこの方法論は，基本的には研究者が単独で行うものとして構築されてきた．一方で，社会学や民俗学，人文地理学などにおけるフィールドワークは，短期的（数日から数週間）なものも多く，かつ現場でのデータ収集に関しても人類学ほどに濃密な人間関係が必要とされないため，大学や高校の教育カリキュラムにおける社会調査として適応可能なものとみなされてきた[2]．

社会調査実習が大学教育で重視されるようになったことは，2008 年に社会調査協会が設立され，社会調査士の資格認定に沿ったカリキュラムが多くの大学で採用されていることからも理解できるだろう．実際に本論で取り上げるプロジェクトも，立教大学の学生はいわゆるG科目の一環として履修している．近年のこの動きは，知識・技

術・文献講読力などの習得から得られる教育的効果に並び，実際に現場で経験を積み重ね，自ら課題を見つけ情報を収集し，自ら問題解決に向けた方法を探し出すという，主体的で創造的な能力を伸ばす教育のあり方に着目が集まっていることと連動している．このような能動的な学習形態は，いわゆるアクティブ・ラーニングやPBL（Project-based Learning，課題解決型学習）教育の一つの潮流として捉えることができ，総合的で主体的な学習環境の構築が急務とされてきた[3)]．

他方で近年「大学の地域連携・地域貢献」への期待が高まるなか，フィールドワーク教育のもたらす地域への様々な効果が注目されてきている．地域社会にみられる多様な資源や文化事象に関する聞き取り・資料収集・記録・分析などを行う関与型のフィールドワークでは，地域住民も調査過程に大きく関与することになる．このことは，住民が自らの生活世界を客体化する契機を得るとともに，外部からやってくる他者との接触から生まれる刺激が精神的な活性化に結びつくことや，調査結果を応用することによる新たな地域開発の可能性にもつながりうる．筆者らのフィールドにおいても，毎年一定の期間に「東京の若えもん」がやってくるという現象自体が，そこに住む人びとの「楽しみ」や「活気」につながっている側面がある．

地域の儀礼や芸能の実践に携わり，身の上話を懸命に聞いてくれる若い世代の存在は，現地に住む特に高齢者にとっては確かに受容可能な刺激的存在だろう．一方で，現地社会の同世代の若者との交流も，日常とは異なった世界の情報をシェアしたり，同じ興味関心を持っていることで共感しあったりと，「全き他者」関係からの変容過程を経験し，教育の文脈を超えた個別の関係性が広がることになる．また，継続的な大学の関与により，様々な立場を持ちうる住民の横断的な関係性が生み出されることになり，公共性が形成されるという側面もあるだろう．こうしたつながりの中から，次世代の地域社会の担い手が育成されていくという状況も期待されている．

このようにフィールドワーク教育は，新たな教育的効果や，地域貢献への影響などプラスの面が多く主張されてきた．ただ同時に踏まえておく必要があるのは，野外教育の近年における称揚が「地方創生」や「地域活性化」という国策と並列的に生じている動きということであり，その意味では常に，フィールドワーク教育は他者理解という当初目的を超えた政治的効果を担わされるリスクを孕んでいるということである．とりわけ民俗学等の地域や文化に関わる学問は，現実政治や経済界の意図に動員されてきた歴史を有しており（岩本2012），石原俊（2017）の言うように政財界のコントロール下に置かれた現今の大学にあっては，社会調査を通じ地方／地域の「良さ」を伝え，よりよい社会の構築につなげたいという学生のナイーブな心性が「地方創生」の文脈に回収されることは容易に生じうるものである．ゆえにフィールドワーク教育と社会実践との無批判な接合は，想定外の「波及効果」を持つことにつながりかねない．だからこそ重要なのは行為遂行的に実現される「効果」を精緻にフォローし，自らの実践や教育が何をもたらすのか常にモニタリングしながら，そのプロセスを自己コントロールすることであろう．

Ⅲ　宮本常一写真の特徴

このような観点でフィールドワーク教育と社会実践を行う点では，宮本写真というのは格好の材料である．なぜなら宮本常一が撮影した1950年代末から80年代初頭の佐渡の写真は地元の人びとにとって身近で懐かしく，何が写っているのか，そこから何を読み取れるのかという筆者らの調査成果自体が人びとの高い関心を呼ぶからである．言い換えると波及効果への潜在能力を有する素材なのである．そこで次に，フォト・エリシテーションの素材としての宮本写真の特徴について明らかにする．

戦前から日本各地をくまなく歩き，日本を代表する民俗学者と呼ばれるようになった宮本常一は，生涯9万枚にのぼる膨大な写真を残したことでも知られている．その多くは「メモ代わり」といわれるようにいわゆる民俗写真とも異なり，フィールドワーカーとしての宮本の目線をそのまま示し

たような，地域や人びとのその場その時の断面が切り取られたものである．宮本の出身地である山口県・周防大島文化交流センター（宮本常一記念館）は，宮本写真をデータベース化しており，全国で宮本写真の社会的活用が進められている[4]．

宮本常一の写真は，ある部分では民俗学という学術的営為を基盤とした写真，つまり民俗写真として捉えうるものであろう．民俗写真を明確に定義することは難しいが，ここでは「民俗」という被写体を捉える写真の総称で，民俗学の発展と深く関わる写真の方法および作品，としておこう．民俗学がフィールド＝野の学問（益田 2006）であるならば，民俗写真はまさに「フィールド写真」なのである．

近代写真史における民俗写真の位置づけについて、菊地暁（2000）の整理に基づいて概観しておきたい．「民俗」を捉えようとした写真家は，大正末年から昭和初期に増加することになるが，彼らは「新興写真」と呼ばれる，ピクトリアリズム[5]的な「芸術写真」の超克を目指した写真界の潮流に位置付けられる．彼らが目指したのは即物主義的・現実主義的な写真だった．また，民俗学や人類学の成立とともに，これらの写真家たちはそれら学術的営為に深く関わり，写真のもつ記録性に大いなる期待を抱いた渋沢敬三（1896～1963）のアチック・ミーゼアムをはじめ，様々な写真技法の確定作業が進められていった．

そこでは主観性／客観性，演出性／非演出性などをめぐる絶え間ない議論が行われていった．なかでも「民俗写真の第一人者」と称される芳賀日出男[6]（1921～）は，資料としての価値を高める「マイナスの演出法」を提示したことでも知られる．これは，被写体に写り込んでしまうノイズやアクシデント，偶然性などをできる限り取り除き，シンプルに再構成された被写体の結晶を写真におさめるというものだ．一方で民俗学の創始者である柳田国男（1875～1962）は，撮影者の意図を排除した「自然さ」を強調し，演出性を排除した，学術的な客観性（ゼネラルなもの）を追い求める写真観を持っていたとされている（菊地 2000: 15）．また，渋沢敬三は集めた写真の情報資源化の過程で，自然さと意識性の双方を綿密に類型化しながら写真をとりまく多様な関連資料・情報との組み合わせによる「読解」の重要性を認識していた（井上2015:86）．これらの議論は，「フィールド写真」というものをどのように定位し，どのように撮影・活用するのかという根源的な問題とも直結しており，とても興味深い．

これら多様な「民俗写真」のアプローチが存在する中で，極めて特殊な位置にあるのが宮本常一の写真群であろう．宮本は生涯にわたって9万枚の写真[7]を撮り続けたが，それをめぐっては，近年肯定的評価を基調とした宮本写真論が盛り上がっている（例えば石川・須藤・赤城・畑中・宮本 2014）．

宮本は，中央から隔絶した周辺地域や離島を徹底的にめぐるイメージが定着しているが，その旅程でとめどもなく写真撮影を続けたことでも有名だ．1960年にハーフサイズのオリンパスペンS[8]を購入してからは特にその撮影数が伸び，「メモがわり」としての写真という側面が大きくなる（土屋 2011）．

宮本写真に関しては，敗戦後の「昭和」を想起させるノスタルジックな面やそのアート性が強調されてきたし，歴史的証言としての「失われたもの」の記録性を過剰に評価する論者が多いが，宮本写真の面白さはあくまでフィールドノートをつけるような軽快さにあり，宮本自身が「読む」ために撮影されたという極めて個人の主観的部分が大きいことにあるだろう．したがって，残された宮本写真を我々が「読む」場合には，写真が置かれたコンテクストと宮本の持っていた特有の視点とを接合させつつ，映し出された被写体の意味を読み解く必要がある．それに最も成功しているのは香月洋一郎の『景観写真論ノート：宮本常一のアルバムから』であろう（香月 2013）．香月は，宮本写真群の中でも一定の割合をもつ景観（風景）写真を取り上げ，写真に付されたメモや本人との会話をもとにその緻密な空間認識のあり方を浮かび上がらせようと試みた．

しかし，こうした「正確」な「読み」とは別の方向で，宮本写真は後の鑑賞者に多くの楽しみを与えてくれる．それは，彼の写真技法の不徹底さ（撮り流しの多さ）からくる，フレーミングの甘

さやブレ・ボケなどによるものと考えられる．こうした（あくまでも部分的に）「いい加減な」撮影により，写り込んでしまった異物や偶然的なもの，撮影時のアクシデントなど，芳賀が極力排除しようとしたノイズが，実に臨場感をもって立ち現れてくる．これは宮本自身も意図していなかったものだろう．そこには，研究者として標本のような形で「民俗」を文脈から切り取ろうとする姿ではなく，そこに「ある」世界を収めようとするリアリスティックな姿勢をも見て取ることができる．宮本写真が厳密な意味での「民俗写真」ではないという前言はこのような彼のまなざしに由来している．

実際，こうした「古来からの」「伝統的な」民俗の世界に収まらない写真は枚挙にいとまがない．ここで筆者らが宮本写真に注目するきっかけとなった一枚を取り上げたい（図1）．この写真は1959年8月7日に撮影された，新潟県両津市（現佐渡市）の北端に位置する願集落で撮影されたものだ．この小学校裏にほされたボロ雑巾は，オリンパスペンSを入手する前に使用していたアサヒフレックスで撮影されている．下見板張りのされた校舎裏の角を，立ったまま見下ろすように撮っており，写真の構図としては完成度の高いものではない．後にこの写真が掲載された『私の日本地図7 佐渡』（初版1970年）では，この写真の「読み」を宮本自身が行っている．

> 村のはずれに小さな学校がある．その小学校の裏側に子供たちが雑巾をほしている．まともなものは一枚だけで，あとはぼろぼろである．そんな雑巾で子供たちは掃除をしているのである．（中略）他の地方ならもうとうにすててしまっているであろうに，佐渡の人たちはそういうものも大事にして，洗ってはつくろって用いているのである．その生活は決してゆたかであるとは言えないけれども，激しい自然の中で孤立同様に生きてゆくには，これほどのつつましさが必要なのだろう（宮本 2009:75）．

図1　願集落における雑巾（1959年8月7日，宮本常一撮影，周防大島文化交流センター所蔵）

ここでは古俗を見いだそうとする懐古的姿勢ではなく，離島という「孤立」した社会にみいだすことのできる，「つつましやか」だが厳しい人びとの生活の断片を具体的に捉えようとする，確固たる意思を感じることができる．宮本の意識は，「過去」のサルベージや再構築ではなく，現状のストイックな把握と，離島振興法の制定（1953年）に深く関わっていったような，現状打破と未来への指向という双方へと向いていた（門田 2017）．

さて，宮本写真の特徴を簡潔に捉えるならば，以下のようにいうことができるだろう．すなわち，①あくまで自身が「読む」ものとして「メモがわり」として撮影されたものであり，宮本の撮影時の視点や意図，その思想的背景を知るには本人の言や個別の写真に関する記録が絶対的に必要となること，また②被写体の種類が多岐にわたっているのと同時に，その撮影手法から偶然性やノイズが映し込まれることが多いこと，従って③本人の「読み」を特定することは困難だが，他者が「読む」ことの可能性の幅が広いこと，が挙げられるだろう．つまり，宮本の視点や意図を取り除いた先に存在しているのは，宮本写真の持つ混淆性とそれが可能にする解釈の広がり，ということもできる．その意味で，宮本写真は「開かれた」ものとして捉えることができ，そこから他者に喚起される記憶や情動の力は極めて強いものとなっている．

だからこそ宮本写真はフォト・エリシテーショ

ンに適した素材なのである．人びとは宮本写真と対峙するときに，その意図や主題にとらわれることが比較的少なく，その細部に写し込まれたディテールへと視野を広げていくことができる．筆者らはこうした人びと＝他者の「読み」の可能性に着目し，宮本本人の視点や意図をできるだけ考慮の外に措くことを目指した．宮本があくまで自身のメモとして撮影を続けていたと仮定するのならば，宮本本人の思想的・政治的ポジションやその都度の文脈・主体性を抽出する作業は，あくまでも宮本理解（それも深読みの）に止まってしまうだろう．そうした方向性は，学説史的研究（民俗学の系譜学的研究），すなわちアカデミズムのための研究という枠組みを出ることができない．そうであるならば，宮本写真の持つ雑多なフックを利用した記憶の呼び覚ましとイマジネーションの発露の力を最大限に生かしていくほうが，過去・現在・未来をめぐる佐渡の人びとの感覚世界を明らかにすることができるという意味で，有意義であると考えたのである．

本プロジェクトはこうした意味で，宮本写真を単なる「ツール」として用いたわけだが，そのツールは極めて（芸術的という意味ではなく，過去の佐渡の持つ微細なリアリティを蘇らせる力を持つという意味で）魅力的なものであり，かつ人びとの強い反応や多岐にわたる「読み」の拡散性も含め，可能性を存分に発揮した資料群でもあったのである．

Ⅳ　佐渡における大衆観光と宮本常一

フォト・エリシテーションの実践例を民族誌的な観点で見る前に，宮本と佐渡という関係性の由来，およびそこに筆者らがどのような経緯で着目したのかを簡潔にまとめておきたい．

筆者らのプロジェクトは，フォト・エリシテーションという人類学的調査方法論を元にした戦後佐渡の開発史に関する研究活動であり，同時にフィールドワーク教育や社会実践の側面を不可分に有している．その取り組み以前，2009年以来筆者らは佐渡において「廃校プロジェクト」という名称で，廃校活用とコミュニティスタディーズを行ってきた．当初は文化人類学・民俗学を専攻する門田，社会人類学を専攻する小西，歴史学が専門の杉本浄（東海大学）による「純粋な」研究プロジェクトだったが，その後複数大学[9]の学部生・院生が参加する大学横断的な取り組みとなった．その一部学生は授業科目として単位化された社会調査実習科目の延長で参加してきたが，全体としては一つの目的を有するプロジェクトへの参加というかたちをとり，研究者，学生，地域住民や行政のメンバーなどを含みこむ多様な主体が連携しながら進められるという性質を持っている[10]．

当初は名前の通り廃校研究を行っていたが，単に廃校の問題に矮小化されることなくフィールドの抱える課題と研究とを連結させるため，「生活文化研究フォーラム佐渡」という任意団体へ改称し，2016年からは宮本写真プロジェクトを主軸とした研究活動を実施している．その背景には廃校舎に象徴されるように地域社会全体の衰退や過疎化が著しく，その問題への理解は廃校を対象とするだけでなく，実に多くの側面からのアプローチが可能だったからである．

佐渡は1930年代以来観光開発が進められ，特に佐渡金銀山の漸次閉山による産業転換は，観光業へと地域経済を回路づけた．戦前戦後の「佐渡おけさ」ブーム，1970年代の国内観光の大衆化（いわゆるマスツーリズム）に乗って，佐渡には日本全国からバスツアーの団体客が大挙して押し寄せるようになる．しかし過疎化は著しく，戦後直後に12万人近くを要した人口も2017年現在約5万7千人となっている．観光で地域発展を促す策もバブル期以降は入り込み客数が漸減しており，岐路に立たされている．

宮本常一が佐渡にはじめに訪れた1958年は，佐渡が観光地として人口に膾炙していく時期である（宮本 2009:251）．宮本は1959年から2年間「九学会連合」佐渡調査のために訪れ，その後も請われて，民俗調査だけでなく観光開発を含めた地域振興や農業指導，文化財保存や博物館設立，鬼太鼓座（現鼓童）の設立支援など，様々な社会開発のために繰り返し佐渡を訪れ，その都度多くの写真を残している．被写体には宮本の関心が表れており，これを筆者らのプロジェクトでは生業，

道具，観光などのいくつかのカテゴリーに分け，2016・17年度は「マスツーリズム」にテーマを絞って調査した．その理由は①宮本自身が住民参加型開発など広い意味での観光に携わったこと，②観光学を学ぶ学生が複数参加していたこと，③宮本が通った時期に佐渡が観光地として隆盛を極めたことである．

特に重要なのは③で，1960～70年代末の時期は佐渡がもっとも観光地として「成功」していた時期であるだけでなく，その後の観光地としての「衰退」と明瞭に対比することができるからである．かつてに比べて「衰退」しているにせよ，観光がいまでも佐渡にとって重要な生業の一つであることには変わりない．だとすれば，佐渡のある時代を明確に特色づけたマスツーリズムを，人びとの生活や地域の歴史とともにきちんと捉えることの意義はあるはずである．観光の歴史が人びとの人生や記憶の中でどのようなものとして生きられ，経験されているのか，宮本写真を媒介に浮かび上がらせてみたいというのが，プロジェクト初年度に設定した研究目的であった．それを踏まえ，次に初年度のプロセスを微視的な視点で振り返りたい．

Ⅴ　写真の喚起力

学生への参加の呼びかけは2016年4月に行い，人数制限のために希望者を絞った上で立教大学，千葉大学，津田塾大学，首都大学東京，東京学芸大学から9名の学生（およびティーチングアシスタントとして従事する大学院生2名＝千葉大学大学院，立教大学大学院）が集まった．学生の専攻は文化人類学の専門課程の学部生，および観光学や教育学の中で文化人類学のゼミに属する者である．彼らは事前に一度集まり，調査の目的と計画について小西より話を聞いた（2016年7月6日，立教大学池袋キャンパス）．それによれば，宮本写真プロジェクトは，まず宮本の撮った写真を持って街や集落に出かけ，その地に住む人びとが写真から何を「読む」のかを書き留め，分析する．つまり，宮本の写真を調査者自身が読み直すというよりも，かつて宮本が撮った被写体周辺に住まう現在の人びとが，宮本写真を見てどう語るのかを調査するものである．したがって，人びとの記憶を呼び出すメディアあるいはツールとして宮本写真を使用し，呼び覚まされた記憶をもとに，今後5年をかけて，佐渡の過去・現在・未来を明らかにしようとするのがこのプロジェクトである．

調査の方向性が示された上で，班分けが行われた．無作為に選んだ3名が1班となり，佐渡での宮本の撮影地に沿って相川班，国仲・両津班，小木班の3つの班が組まれた．2016年度のテーマは「マスツーリズム」である．現地に行った際に，観光に関する人びとの記憶を引き出しうると学生たちが判断した宮本写真を，1班10枚をめどに選出する作業をおこなった．その際，宮本の佐渡来島年譜（門田・杉本 2014），周防大島の宮本常一記念館から提供された佐渡写真のリストと閲覧用の写真の3点が使用された．

佐渡での本調査は2016年8月15日～22日の間に，二見集落センターを拠点に行われた．初日は集落センターに宿泊用のふとんを搬入したり，一週間お世話になる地域の人に挨拶をしたり，食料品や日用雑貨を購入したりといった生活準備[11]に時間を費やした後，夜はあらかじめ選んだ写真が実際どこで撮影されたものなのか，地図を見ながら場所を特定していく作業を行った上で，翌日の行動計画が立てられた．撮影地点は宮本の日記や前後の写真のランドマークなどから筆者らが大まかに場所を予想し，学生本人に細部の詰めをさせるものである．2日目は朝からそれぞれが調査地に向かい，まず宮本写真が撮られた場所を突き止めるまで，現地の人に写真を見せながら歩き回った．地点が確定すれば宮本の写真と極力同じ画角，同じ絞りで現在の場所の写真を高画質で撮影する．

この作業はどこの班も必ずやることであるが，こうした探偵風の聞き込みは楽しく行うことができたようで，調査の入り口としてはハードルが低く感じられるものであった．というのも，ほとんどの学生は見ず知らずの場所で見ず知らずの人に声をかけることは初めての経験であり，我々のサポートもあったにせよ，戸惑いの中からの第一歩だからである．ゆえに写真の場所が特定されると

それなりの充実感を得ていたようである．

3日目からは，写真を見て想起される人びとの語りの収集作業とそれから得られた内容からテーマを絞り込み，さらに関係者に聞き取り調査をしていった．この種の調査は基本的に最終日まで続く．ここまで来るとほぼ学生任せとなるが，毎晩のミーティングでその日の調査結果について一人ひとりに話してもらい，適宜教員からの助言を受けていた．なお，小木班は拠点のある二見集落から遠いため，3日目からは宿根木集落を拠点に調査することになり，夜のミーティングでは21時までにLINEのノート機能を用いて文章で報告することとなった．

この調査の具体例として相川班の北片辺集落調査を紹介しよう．北片辺集落というのは佐渡の西海岸，外海府と呼ばれる日本海に面したエリアの一部で，漁業・農業主体の集落であり，特に冬季は大陸から厳しい風雪が打ち寄せる地域の一つである．宮本は1959～60年の九学会連合調査で外海府エリアの牧畜業を経済史的観点で調査しているため，この地域には何度も訪れたことがあったと思われる．この集落の写真を選んだ女子学生は，「観光」が共通テーマであったためか，旅館が道の奥に写っている写真を選出した（図2）．2日目に筆者らとともに実際に現場付近に行って，その場所がどこであるのかを探し歩いたのだが，全く分からなかった．そこで県道沿いの集落唯一の雑貨屋が開いていたので，そのおかみさんに写真を見せた．するとあっさりその場所が判明し，雑貨屋から見えるところに写真とはいささか異なる風貌でその旅館の建物はあった．現在の持ち主は，旅館のあったところの向かいに住んでいるとのことである．早速行って戸口で声をかけると70歳ぐらいの男性（以下主人とする）が顔を出した．写真を見せるとすぐに合点し，旅館に案内してくれるとのことである．

案内されるとそこは既に旅館ではないことは一目瞭然であった．かつて旅館を営んでいた夫婦が昭和40年頃に廃業し，新潟市にいる息子夫婦のところに引っ越したこと．この旅館は観光客が泊まることは全くなく，木挽きや牛の仲買人，分校の教員などが泊まっていたこと．自分が旅館を引き取り，工務店の作業場に転用したこと．これらが作業場を案内する主人から聞き取れたことである．また，宮本写真の撮影時点よりも目の前の元旅館の奥行きが明らかに短く感じられるのは，道路拡張の際に，真ん中の食堂のあった平屋の棟を壊し，前の棟を曳家で後ろの棟と繋げたからだと教えてくれ，実際に繋げた内部箇所も見せてくれた．ここまでは宮本写真と現在の比較を行うような事実関係に関する聞き取りである．

写真1　松屋旅館とハサ（1959［昭和34］年8月5日　宮本常一撮影）

①屋根（木っ端ぶき、コバ）。杉の皮を何重にも敷きつめて、それが飛ばないように石でおさえている。
②松屋旅館。主に仕事目的で来る人が宿泊した。民話「鶴女房」ゆかりの地。
③馬小屋。
④ハサ（ハセ、ハゼ）。刈り取った稲を干す場所。縦の太い木はおそらく開引きされた杉、横の木は竹。岩谷口には今も残るハサは高いところまで横の竹がくくりつけられ、3段、4段になっている。写真のハサは背の低い人が管理していたため、低い作りになっていた可能性がある。
⑤あぜ豆。水田の水があふれないように土を盛って、囲ったスペースの有効活用として、豆を植える。収穫された豆は、それぞれの家で味噌や醤油に加工される。

写真2　元松屋旅館の現在の姿（2016年8月1日　筆者撮影）
石屋根の建物から先が、道路拡張によって削られた事がうかがえる。水田も畑に変わり、ジャガイモらしき植物が植えられていた。道の傾斜や周囲の雰囲気は変わらない。

51

図2　松屋旅館の新旧写真をまとめた報告書該当ページ．学生の撮影技術が未熟で構図が宮本写真と全く異なっていることが窺える
（門田・小西・杉本・佐藤・石野編 2017:51）

ところがこうした写真にまつわる話は，その後全く予期しない方向へと進んだ．それは主人の経験と記憶が鮮明に立ち現れる瞬間でもあった．それは北片辺集落の曲がり道にある「夕鶴の碑」の話である．柳田国男門下の若き民俗学者・鈴木棠三（とうぞう）（1911～1992）が1936年にこの旅館に滞在し，北片辺周辺の民話を集めた（鈴木 1939）．その中にあった「鶴の恩返し」を題材に，後に劇作家・木下順二（1914～2006）が戯曲「夕鶴」を

図3 「裂き織の里　鶴女房」での聞き取り調査
（2016年8月17日，杉本浄撮影）

書き，1949年1月号の『婦人公論』に発表した．同じ年の秋に劇団「ぶどうの会」が山本安英（やすえ）（1902～1993）の主演で「夕鶴」を上演した．その後山本は千回以上の公演を重ね，教科書に採用されたこともあり，全国に知られるものとなった．

この「夕鶴」を出版した未來社の社長西谷能雄，木下，山本に加え，民話を採取した鈴木も1987年10月20日の除幕式に招待された．主人によれば，その際，鈴木はどうしても自分が逗留した旅館の跡が見たいと，ここを訪ね，自分が案内したのだと活き活きと語ってくれた．

その後，話は序幕式を中心に展開した．主人はこの碑の設立運動に青年団として加わり，活躍した人物でもあった．しばらく，運動の経緯が詳細に語られた．大体の話が尽きると，やにわに携帯電話を取り出して知り合いにすぐに来るように求めた．間もなく小型トラックに乗って，ねじりはちまきをした威勢のよい男性が現れ，彼の案内で「裂き織の里　鶴女房」というこの地域の民話を観光客に語り部が語ってくれる施設（既に閉館）に連れて行ってくれた（図3）．二人は学年が近く，南片辺集落にあった小学校の分校舎に一緒に通った仲でもあるらしい．全員で宮本写真を見ながら小学校時代の話からはじまり，夕鶴の碑の話，さらに閉鎖される前の「裂き織の里　鶴女房」での活動の話になった．

それによると，この施設では北片辺周辺の民話を観光客相手に披露しただけでなく，飲食も提供したという．いわば民話を観光資源として活用し，それが収入にもなった話である．佐渡観光が最も賑わった1990年代初め，活気があった頃の話になると彼らの声も弾んだ．しかし，すでにここが使用されていないことからわかるように，バブル期以降は客足が徐々に遠のいていたという．ホテルへ出張して民話を語るも，宴会に忙しい観光客は民話に関心を持たず，語り部の事業から撤退し施設自体も閉めることにしたとのことである．その後，「裂き織の里　鶴女房」から歩いて全員で夕鶴の碑の場所へ行った．主人は刻まれた石を愛おしむ様子を見せ，案内の看板が痛んでいるのをしきりに気にしていた．ここで主人に礼を言って別れた．

この例からもわかるように，写真の調査は当初学生たちが予測した反応とは全く異なるものであった．この場合，写真に写っていた旅館は当初学生が予想していたように観光客が泊まるものではなく，昭和のマスツーリズムとも全く繋がりはなかったが，その旅館に逗留した民俗学者の民話収集が後に劇作となり，そうして発掘された民話が見直され，観光資源となっていったという話は，宮本写真が調査者の予想外のルートで当初テーマである観光につながっていったというものである．これはまた，佐渡観光の栄枯盛衰の歴史とも重なる話だったため，存外に収穫の多い聞き取りとなった．このように宮本写真プロジェクトは宮本写真を介した，予測不可能な住民たちの読みから出発し，人びとの記憶と今の暮らしを見つめ，地域社会の変化を新たに読みなおす取り組みだと言えよう．

Ⅵ　ローカルメディアミックス

以上のようなプロセスで調査を終えると，事後の成果作りが始まる．その具体的な過程は以下の通りとなる．まずは東京において，参加メンバーを集め，全体ミーティングが行われることになる．これは，調査とは現地においてなされるものだけではなく，自ら属する社会におけるフィールドデータをもとにした言語化過程が重要な意味を持つことを提示するための，儀礼的効果を目論んだものでもある．具体的には，調査内容の中間報告を各自が行い，討議を重ねながら報告書に向けた

図4　報告書表紙
（2017年1月，門田装丁）

テーマや論点を明確化していく．執筆は10～12月に2ヶ月ほどを費やし，この間筆者ら教員は割り振られたメンバーの個別指導を行う．初稿にコメントと改稿指示を行って2回のリライト，校正を経て，1月半ばに決定稿が提出される．その後，筆者（門田）がDTPソフトを用いて編集作業を行い，1月末に印刷所入稿となった（図4）．最終的に各文章は概ね1万3千字相当となり，宮本写真の今昔比較に加え，各人が設定したテーマの考察を行った．

本プロジェクトではしばしば学生（特に学部生）が初めて自らのデータを元にした長文を書く機会となるが，それでも単に勉強成果としてではなく読者を想定し読ませる文章を書くことを重視してきた．報告書は単に調査の事実をまとめた自己完結的なものではなく，インタビュー協力者や地域への一種の社会還元であり，継続的なつながりを維持するためのリソースでもある．調査者側にとって新たな知見の発見を得る機会となるフィールド調査は，他方で地域住民にとっても日常を「異化」し，自らの記憶や生活史を語ることで新たな発想に至る契機になる．とりわけ都市部からの学生が投げかける素朴な質問や驚きとともに書かれた文章は，普段意識しない自明的な生活世界を客体化するインパクトを持っている．そのため報告書はできる限り正確で，かつ誰が読んでもわかりやすく，問題提起的であることを重視してきた．併せて重視しているのは考察や結論を調査地に対する安易な「提言」にすべきでないという点である．高齢化が進む過疎地域の社会問題を目の当たりにした学生は往々にして安易な提言を行いがちであるが，民族誌的調査で調査者が「覗き見る」ことのできたものはあくまで「部分的真実」であり，その繋留点から離れない範囲で言語化していくことが民族誌的調査の基礎であることを主張している．

報告書はインフォーマントや関係先に送付したが，社会実践の面での「成果」はそれにとどまるものではない．通常社会調査実習ではいわゆる報告書を印刷・配付した段階で事実上活動を終えるが，報告書を佐渡の複数機関に送付すると，これを活用したいというレスポンスがあった．具体的には筆者らが行った宮本写真の読み解きと，現在の地点との比較をパネルに引き延ばし展示会にしないかという打診である．筆者らの長年の知人が館長を務める市立佐渡博物館で2017年4月1日から6月20日まで開催した「特別写真展・宮本常一写真で見る佐渡」は，宮本写真から地元の人が何を想起し語ったのかを表現した展示会となった．

佐渡では宮本常一が広く知られており，また地域の今昔の変化を見られるということもあって，この写真展は多くの地元住民の関心を呼ぶこととなった．そこで急遽報告書を増刷し，印刷実費程度の価格で頒布したところすぐに品切れとなってしまい，展示期間中に計150冊程度は求められた．高い関心を呼んだことから市立博物館側は同年8～9月に佐渡南部にある別の市立博物館（佐渡国小木民俗博物館）で再度の開催を提案してきた．同博物館がある宿根木集落は，生前宮本が社会開発事業に最も深く関わった場所の一つであり，かつ宮本写真のなかで被写体として多かった場所である．夏期の観光シーズンも重なって再び同様の注目を浴びた．

次に，佐渡国小木民俗博物館での展示期間中，毎年佐渡南部で開かれるアートイベント「アースセレブレーション」において，イベントの一環として宮本写真に関するセミナー，および宮本写真を持っての街歩きイベントを開催してほしいという依頼を受けることになった．イベントは佐渡を活動拠点とする和太鼓集団・鼓童が中心となって開かれる音楽系イベントであり，佐渡のローカリ

「旅する巨人」見つめた佐渡

民俗学者・宮本常一写真展

島の観光考える60点

「旅する巨人」と呼ばれた民俗学者・宮本常一（1907～81年）が佐渡島で撮影した写真を紹介する企画展が、佐渡国小木民俗博物館（佐渡市宿根木）で開催されている。宮本の足跡を通じて島の再生を探る5年計画のプロジェクトの第1弾で、佐渡市教委や研究者らが企画した。

写真は、宮本の故郷・山口県周防大島町の「周防大島文化交流センター」が保管する約4000枚の中から、立教大の研究者らが選んだ。

企画展のテーマは「観光マスツーリズム」。宮本が昭和30～40年代に撮影した写真と、それらの写真の撮影地と同じ場所で撮られた現在の写真や資料など約60点を展示。同大の学生らによる島民への聞き取り結果も紹介して佐渡観光のあり方を問いかけている。

佐渡は高度成長期に国内有数の観光地となった。気

❶宮本が撮影した佐渡島内の写真に見入る来場者。撮影地の現在の様子を写した写真も展示している（佐渡市で）❷在りし日の宮本常一（宮本常一記念館提供）

宮本常一　山口県周防大島生まれ。日本各地の農山漁村を歩き続け、辺境の生活経済や漁労習俗、昔話や民間信仰などを研究した。離島振興や地域開発、農業指導にも関わり、佐渡島の太鼓芸能集団「鼓童」の前身とも言える「佐渡の島太鼓座」を立ち上げた。著書に「忘れられた日本人」など。

図5　写真展を伝える新聞記事
（2017年8月16日，読売新聞新潟版）

ティに関する文化的な講座も組み込まれている．筆者らが講師として行ったセミナーおよび街歩きイベントは2017年8月19日に行われた．セミナーでは，宮本写真の持つ特徴やその貴重さ，有効性などについての簡単なレクチャーとともに，宮本と佐渡との関わり方や，宿根木における町並み保存事業や観光地化の顛末などに関しての講義を実施した．その後の街歩きでは，写真をもとに実際に街路や建造物の景観，生活道具や習俗の経年変化を実証的に示しつつ意見交換を行うことで，島内外のオーディエンス20数名と改めて佐渡の日常生活を捉え直す場となった．

重要なのは一連の写真展やセミナー，街歩きイベントがその都度ローカルなメディアで取り上げられ，地元で多くの人に認識されたという事実である．写真展に関しては筆者らの佐渡滞在（2017年5月連休）に合わせて読売新聞，新潟日報，地元CATVの佐渡テレビなどの取材を受け（図5），8月のセミナー・街歩きはNHK新潟放送局の記者が丹念に取材し，8月24日に「宮本常一がみた佐渡：『旅する巨人』の足跡をたどる」というニュース特集として新潟県内で放映された．CATVやNHKローカルニュース，また新聞の地方版は多くの人が日常的にチェックしており，20分に亘って放映されたNHKの特集はとりわけ反響が大きく，放映後も佐渡で調査を続けていた筆者らは各所で幾度となく声をかけられる機会があった．

こうした博物館での展示やメディアでの露出は決して当初から計画したものでもないし，自ら「売り込み」を積極的に図ったものでもなく，強いて言えば報告書をきっかけにアドホックにつながっていった連鎖である．その連鎖は意図したものではなかったが，他方で当初から，そのような帰結に至ることを予測／期待（expectation）したものであったのは確かである．フィールドワークやその成果の「波及効果」を定量的に測ることは極めて困難であるが，これら目に見える形での連鎖が生じたこと自体，予測／期待がある程度現実化したということであり，その意味で一定の波及が生じたといっても良いだろう．

これらは我々や学生が行ったフィールドワークの成果を単に報告書という活字メディアに止めるのではなく，佐渡というローカルな地域において調査や思考の結果を複数チャンネルの様々な表現媒体に変換しながら拡大させるという，いわばローカルメディアミックスとでもいうべき展開である．報告書は活字でできた単なる冊子でしかない．しかしそれを出発点とし，連鎖的に人びとの関心や次のイベント，メディアでの反響などが生み出されていくこと，つまり学術的営為から広く社会的なインパクトが生成される．佐渡という（人口圏という意味で）狭いエリアで，いくつかのメディアをミックスさせながら波及していく試みは，その都度見る人に何らかのイメージを喚起していく．それは人によってはノスタルジーであったり宮本常一への関心であったり，あるいは学生や研究者という外の目線を介した自己理解への関心であるかもしれない．またそこから地域の社会問題を捉え，未来像を描く人もいるだろう．こうしたイメージを喚起することもまた，フィールドワークやエスノグラフィという手法に内包した潜在力だと捉えることができる．

Ⅶ　おわりに

では冒頭の問いに戻り，以上記した研究と社会実践が融合した取り組みが，フィールドワーク教

育としていかなる意味を持っているのだろうか．まずもって学生には写真というメディアが有する人びとへのイメージ喚起力が一種の驚きであったことが挙げられる．Ⅳで描写したように宮本常一の撮影した1950～70年代の写真を現代の学生が見ると，多くは現代の価値基準で推測を行う．その予見を持ってインタビューに赴くと往々にして予見を覆す事実が判明し，さらに当初は考えもしなかった方向へと会話がスライドし，次々と想起される記憶（あるいは何かを思い出せないという事実）が別のインフォーマントを呼び寄せることになり，ますます会話の逸脱が行われる．写真が持つイメージ喚起能力の高さとそれが現実の人間を突き動かしていくという現場に立ち会うことは，彼ら・彼女らの日常の中に当たり前のものとしてあるカメラや写真が，エイジェンシーを持った存在として動き始める瞬間でもある．フィールドワークの初歩段階では人と会うことに物怖じする学生も少なくないが，写真という物質は彼らの調査経験の不足を明らかに穴埋めしていく力を有しているのである．

そのことを学生当人が改めて認識するのは報告書という物質性のある媒体が連鎖的なイベントや波及効果を生み出したり，彼らが基礎を作った写真パネルが展示会において多くの人を動員したりしたときである．当初宮本写真を読み解いて成果を文字で示せば一通り事足りるだろう，という程度に考えていた彼らは，自らの集めたデータや思考の結果がフィールドに環流し，出来事の連鎖や人びとの流れを生み出していくことに驚きを持ったようである．同時に鋭敏な学生であれば「書く」ことの意義だけでなく，書いたものが現実を構成してしまうという一種の「恐怖」を同時に感じ取る．これは人類学における民族誌論で議論の重ねられてきた，書く側＝調査者と書かれる側＝被調査者との非対称的な関係性という論点に関わるものであり，フィールドワーク論において人類学徒が一度は触れておくべき学習の階梯である（クリフォード・マーカス 1996）．

収奪的な調査ではなく，フィールドやインフォーマントと双方向的な関係を維持することは，本プロジェクトのようなアクションリサーチにおいて特に重要である．一度始めたプロジェクトを一回性のイベントとして終わらせることは，その場で盛り上がる「クローク型コミュニティ」（バウマン 2010）を演出することはあっても，持続する活動を生み出すことはできない．この継続性は社会関係の継続的な構築にも繋がり，また我々も含めた多くのアクターの，相互作用による長期的な社会実践へと発展させていくことにもなる．現在の学生は授業やサークル等いくつかの文脈で「地方創世」や「まちづくり」の名の下に地域的なイベントに参加する機会を与えられ，短期的なスタディツアーの機会もあふれている．ゆえに単発イベント型のその種のものとフィールドワーク教育との境界線は学生にとって不明瞭になりつつあり，調査や思考の方法だけでなく現地社会との関わり方の面においてもフィールドワークの独自性を示す必要がある．本プロジェクトが報告書以後の活動で行ってきたような多様なアクター間のネットワーキングや調整役，人びとの多方向的な意思のベクトルをつなぎ合わせていくような「翻訳作業」という部分は，人類学的な「関与型」フィールドワーク教育において重要であるし，学生はそこからフィールドとの関わり方の一端を認識していると思われる．フィールドワークとは見知らぬ他者との間で構築されていく関係そのものが，調査者と被調査者の双方の「学び」の過程となるのである．

注

1）本論は同プロジェクト2016 年度報告書（門田・小西・杉本・佐藤・石野編2017）の序章の一部を元に，小西（2018a；2018b）の文章を一部付し，全体を改稿したものである．特に本論3 章は杉本浄氏の執筆箇所を下敷きにしており，転用・改稿を許可してくれた同氏に感謝したい．

2）例えば，大阪教育大学の付属高校では「課題研究フィールドワーク」がカリキュラム化されており，医療や防災，格差の問題などのテーマに沿ってグループ分けされた学生たちが実際に現場に入り，現地の人びとの話に耳を傾けるといった手法が制度化されている．

3）公教育の文脈においても，新たな学習指導要領（中学校）の中で「地域調査などの具体的な活動を通して地理的事象に対する関心を高め，様々な資料を適切に選択，活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し公

正に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる」（社会地理的分野目標4）と明記されるなど，地域社会におけるフィールドワークの実施が強く勧められている．

4）それが宮本写真をもとにした今昔の聞き取り調査であり，写真を単に「記録」として捉えるだけでなく，人びとの記憶や語りを呼び出す想起の装置として捉えるプロジェクトとして，各地で実践されている．例えば周防大島では小学生が宮本写真を持って地域の人に聞き取りをし，写真展に表す取り組みが行われている．また離島振興センターの機関誌『しま』では，シリーズ「宮本写真を読む」が連載されている．

5）写真の記録性に対する偏重や，絵画作成の補助的な機能を超えて，写真を「芸術」の域に昇華させるために，19 世紀半ばのロンドンから開始された写真の方法論の動向．写真撮影の様々な方法論（構図や主題，背景処理など）を，絵画の手法に沿った形で確立していくやり方である．日本では「芸術写真」として，海外の動向を取り入れながら独自の方法論が展開していった．

6）民俗研究者・写真家の芳賀は，日本・世界で民俗芸能や祭礼の撮影をし続けたことで知られる．民俗学者・関敬吾の要請で，1955 年には九学会連合奄美大島共同調査隊に参加し，それが転機となり，生活世界を包括的に写真に収めることの重要性を認識するに至った．芳賀は宮本とともに五島列島をはじめとする九州の調査にも参加し，宮本式の実践的民俗学の方法論に感銘を受けており，宮本を生涯で最も尊敬する人物の一人としてあげている（菊地 2004）．

7）内訳は35mm のネガフィルムが1900 本，カラーポジフィルムがオリジナルで500 本，スクラップブックに写真を貼り付けて整理されたものが171冊あったという（高木 2012）．フィルム及び現像代が極めて高価な時代，宮本の写真撮影量は他の民俗学者のなかでも突出しているといえる．

8）1960 年からハーフサイズのオリンパスペンS の使用が始まるが，それ以前はアサヒフレックスIという国産初の一眼レフカメラによる撮影を行なっていた．ペンSの購入後も，文書などの複写にはアサヒフレックスを使用していたようだ．ちなみに宮本はカメラへのこだわりが強かったようで，1962 年からの3 年間で5 台のカメラを使用していることがわかっている．カメラを失くしたり故障したりした時には調査中にカメラを新調した記録もある（印南 2012）．

9）首都大学東京，東海大学，立教大学，東海大学，武蔵大学，千葉大学，慶應義塾大学等，主に3 名が常勤・非常勤で教える大学の学生である．

10）詳しくは小西・門田・杉本（2014）および小西（2018b）を参照．

11）合宿の形式について本論では詳述しないが，一般に文化人類学や民俗学のフィールドワーク教育では1 週間～2 週間の滞在を民宿だけでなく地域の集会所や公民館で行うことも珍しくなく，その場合往々にして食事，風呂，移動手段の確保が懸案事項となる．特に風呂はこの種の地域的な施設に滞在できるかどうかの最大のファクターとなるが，本プロジェクトでは「もらい湯」と呼ばれる地域の協力者数軒の家から風呂を借りる仕組みを作ってしのいでいる．

文　献

秋山裕之・小西公大編（2016）：フィールド写真術，古今書院

石川直樹・須藤功・赤城耕一・畑中章宏・宮本常一（2014）：宮本常一と写真，平凡社

石原俊（2017）：群島と大学―冷戦ガラパゴスを超えて，共和国

井上潤（2015）：渋沢敬三の画像・映像資料認識（「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」国際常民文化研究叢書10），pp.75–86

岩本通弥（2012）：民俗学と実践性をめぐる諸問題―「野の学問」とアカデミズム（岩本通弥・菅豊・中村淳編「民俗学の可能性を拓く―「野の学問」とアカデミズム」青弓社），pp.9–82

印南敏秀（2012）：宮本常一写真の可能性―瀬戸内と三河のフィールドワークを通して，民具研究，146，pp.1–10

香月洋一郎（2013）景観写真論ノート―宮本常一のアルバムから，筑摩書房

門田岳久（2017）：「離島性」の克服―宮本常一と反転する開発思想，立教大学観光学部紀要，19，pp.23–37

門田岳久・小西公大・杉本浄・佐藤航也・石野隆美編（2016）：宮本常一写真で読む佐渡―①マスツーリズム，生活文化研究フォーラム佐渡

門田岳久・杉本浄（2013）：運動と開発―1970年代・南佐渡における民俗博物館建設と宮本常一の社会的実践，現代民俗学研究，5，pp.33–49

菊地暁（2000）：柳田国男と民俗写真―あるアエノコト写真のアルケオロジー，日本民俗学，224，pp.1–33

菊地暁（2004）：距離感―民俗写真家・芳賀日出男の軌跡と方法，人文学報，91，pp.61–96

クリフォード，J. & マーカス，G.（1996）：文化を書く―エスノグラフィーの詩学と政治学（春日直樹他訳），紀伊國屋書店

小西公大（2018a）：フィールドワーク教育の可能性―〈支援〉から〈協働〉へ，「教育協働支援」の構築へ向けて（教育支援協働学会），pp.37–40

小西公大（2018b）：異種混交が生み出すフィールド教育の可能性―離島・廃校舎・ローカリティ，社会と調査，20（印刷中）

小西公大・門田岳久・杉本浄（2014）：「協働」を生み出すフィールド―廃校をめぐる研究・開発・教育のはざまで（椎野若菜・白石壮一郎編「フィールドに入る―100万人のフィールドワーカーシリーズ」古今書院），pp.137–157

鈴木棠三（1939）：佐渡昔話集（佐渡民間伝承叢書第2輯），民間伝承の会

高木泰伸（2012）：宮本常一写真データベースの現状と課題，民具研究，146，pp.11–19
土屋誠一（2011）：景観をめぐる時間と空間の政治学―宮本常一／写真／地図，現代思想，2011年11月臨時増刊号，青土社，pp.222–229
バウマン，ジークムント（2010）：リキッド・モダニティ―液状化する社会（森田典正訳），大月書店
益田勝実（2006）：「炭焼日記」存疑，鈴木日出男・天野紀代子編「益田勝実の仕事1」，筑摩書房
宮本常一（2009）：私の日本地図7　佐渡，未来社
Collier J., Collier M., 1986. Visual Anthropology: Photography as a Research Method. Albuquerque, University of NewMexico Press.

■